

今週の為替相場見通し(2018年4月2日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ	
		注	レンジ	終値		
米ドル	(円)		104.65 ~ 107.01	106.27	105.00 ~ 108.00	
ユーロ	(ドル)		1.2284 ~ 1.2476	1.2320	1.2250 ~ 1.2550	
(1ユーロ=)	(円)		129.32 ~ 131.82	130.97	130.00 ~ 132.00	
英ポンド	(ドル)		1.4011 ~ 1.4244	1.4025	1.3900 ~ 1.4100	
(1英ポンド=)	(円)	*	147.05 ~ 150.31	148.02	148.00 ~ 150.50	
豪ドル	(ドル)		0.7643 ~ 0.7758	0.7686	0.7500 ~ 0.7800	
(1豪ドル=)	(円)	*	80.50 ~ 82.58	80.62	80.00 ~ 83.00	

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替市場第一チーム 森田 大貴

(1)今週の予想レンジ: 105.00 ~ 108.00 円

(2)ポイント[先週の回顧と今週の見通し]

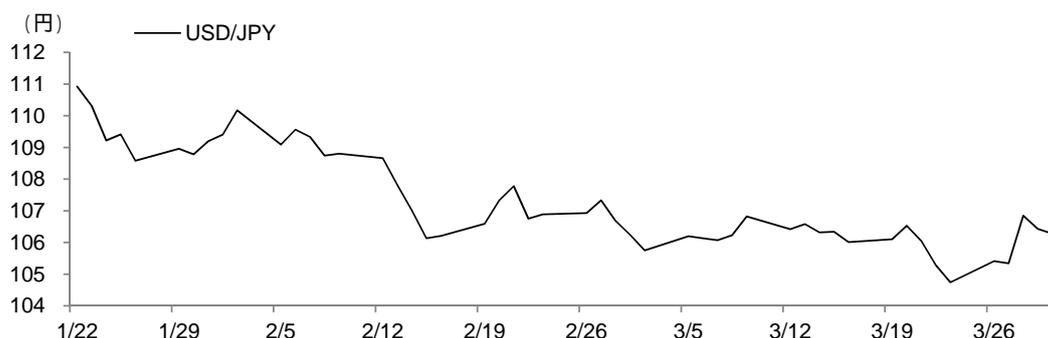
先週のドル/円相場は週央にかけて上昇し、その後は上値重く推移した。週初26日に104円台後半でオープンしたドル/円は、先週末の円買いの流れを引継ぎ一時週安値となる104.65円をつけたが、ムニューシン米財務長官が中国との通商交渉開始を示唆したことを受け貿易摩擦の懸念が和らぐと105円台を回復。その後は反落していたNYダウ平均が上昇に転じると105円台半ばまで値を上げた。27日は森友文書問題に対する佐川前国税庁長官の証人喚問では特段のサプライズがみられない中、米中間の通商交渉により両国の貿易摩擦を回避できるとの見方から105円台後半まで続伸した。28日は米10~12月期GDP(3次速報値)が前期比年率+2.9%と2次速報値(同+2.5%)から大幅に上方修正されたことを材料に106円台前半まで上値を伸ばした。その後も月末に伴うポジション調整フローからドル買い地合いとなる中、北朝鮮の金正恩政権が日朝首脳会談の開催を模索しているとの報道を受けリスクオンムードが拡がると、ドル/円は上げ幅を拡大し一時週高値となる107.01円をつけた。29日は、月末需要を背景に米長期金利が2月上旬以来の低水準まで低下すると106円台前半まで下落した。翌30日、ドル/円は東京時間に期末の円転需要に106.12円まで下落する場面も見られたが、米市場参加者がイースター休暇に入る中で膠着状態となり、106.27円で越週した。

今週のドル/円相場は底堅い展開を予想。先週は、一部海外勢がターゲットとしていた105円割れが達成されたこともあり、月末に絡むドル買い需要やイースター休暇前のポジション調整による買い戻しも相まって、一時107円超えまで上昇する展開となった。テクニカルにも、一目均衡表の基準線の上抜け等、底打ち感が強い格好となっている。過度な米中貿易戦争懸念の後退、北朝鮮を巡る緊張緩和に加え、米テクノロジー株も買い戻され市場が落ち着きを見せている状況下、週末に米雇用統計を控えていることを考えれば、今週もドル/円は底堅い展開となりやすいか。需給環境に鑑みても、月末に既に相当の輸出の円転フローをこなした一方で、足元クロスボーダーM&Aの報道が相次ぎ、円売りフローが期待されることもドル/円のサポート材料。尚、来週は、2日(月)に米3月ISM製造業景気指数、4日(水)に米3月ISM非製造業景気指数、6日(金)には米3月雇用統計の発表が予定されている他、3日(火)にカシュカリ・ミネアポリス連銀総裁、4日(水)にブレイナードFRB理事、ブラード・セントルイス連銀総裁、マスター・クリーブランド連銀総裁、5日(木)にボスティック・アトランタ連銀総裁、6日(金)にパウエルFRB議長の講演が予定される。

(3)先週までの相場の推移

先週(3/26~3/30)の値動き:

安値 104.65 円 高値 107.01 円 終値 106.27 円



2. ユーロ

(1)今週の予想レンジ: 1.2250 ~ 1.2550 130.00 ~ 132.00 円

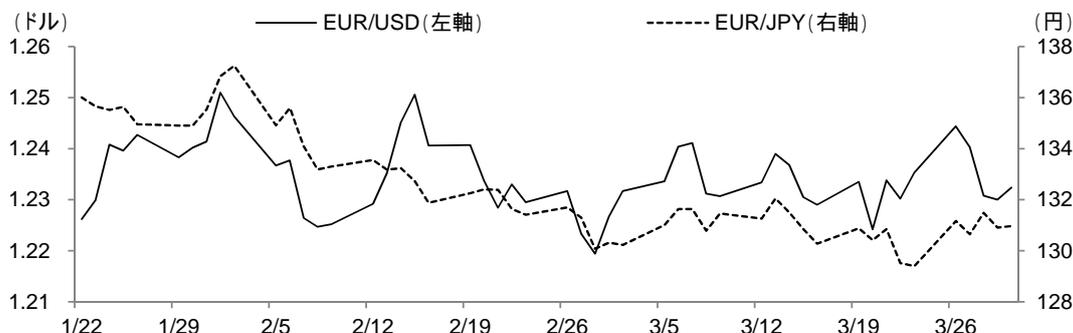
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ相場は対ドルで上に往って来い、対円では堅調推移となった。対ドルでは、週初26日に1.23台半ばでオープン。月末フローにサポートされて底堅い展開。バイトマン独連銀総裁が「ECBの金融正常化は早急に開始すべき」とコメントしたことも材料視され、1.24台半ばまで上昇。翌27日には週高値1.2476まで上昇するも、イースター休暇を控えていることも意識され、上値追いは続かなかった。寧ろ米中貿易戦争への懸念後退からドルが買い戻されると、1.23台後半まで下落。週央28日、米金利の低下を受けて1.24台前半まで反発する局面があったものの、発表された米10~12月期GDP(3次速報値)が予想を上回るとドル買い地合いとなり、1.23ちょうど近辺まで下落。翌29日、イースター前のロンドンフィキシング近辺にかけて1.2284の週安値をつける局面があったものの、米金利が低下する流れに1.23ちょうど近辺まで反発。週末30日、イースターで多くの市場が休場となって動意を欠く中、1.23を挟んだレンジ推移となり、1.23ちょうど近辺で越週した。対円では、週初26日に129円台前半でオープン。市場参加者の少ないオセアニア時間に週安値129.32円をつけるも、翌27日には対ドルの上昇に牽引され週高値131.80円をつけた。その後は130円台半ばから131円台半ばのレンジ推移となり、131円ちょうど近辺で越週した。

今週のユーロ相場は堅調推移をメインシナリオと考える。先週はECB高官によるタカ派的な発言があったものの、米中貿易戦争懸念後退や良好な米経済指標の結果を受けてドル買い優勢となっている。しかし、米国は11月の中間選挙に向けて通商政策で簡単に矛を取めるとは考えにくく、中国も北朝鮮問題を巡り主導権を握りたい情勢下で通商面とはいえ安易に態度を軟化させるとは考えにくい。貿易戦争懸念が後退したと捉えるには時期尚早であり、両国政府要人発言等をきっかけに、先週後半に入ったドル買いの巻き戻しが起こるのではないだろうか。また、今週は米3月雇用統計の発表が予定されている。季節要因の剥落により非農業部門雇用者数は前月比20万人弱程度の増加に留まると予想されているが、市場では良好な雇用環境が継続し、賃金の緩やかな伸びが続くと想定している向きが多い印象である。そのため、予想を多少上回る結果になったところで、そのシナリオを確認するに過ぎずドル買いの反応は限られるだろう。一方で、予想を下回った際のドル売りの反応は大きくなると思う。年明け以降、例えば米10年債利回り上昇を続け、3月には2.9%台まで達していた。金利上昇が雇用環境に重石となり、雇用統計が予想以上に弱い結果になる可能性もあると考えている。その他、今週の経済イベントとしては4日(水)ユーロ圏3月CPI、米3月ADP雇用統計、米3月耐久財受注の発表が予定されている他、週を通してFRB高官の講演が複数予定されている。

(3)先週までの相場の推移

先週(3/26~3/30)の値動き: (対ドル) 安値 1.2284 高値 1.2476 終値 1.2320
(対円) 安値 129.32 高値 131.82 終値 130.97



(資料)ブルームバーグ

3. 英ポンド

(1)今週の予想レンジ: 1.3900 ~ 1.4100 148.00 ~ 150.50 円

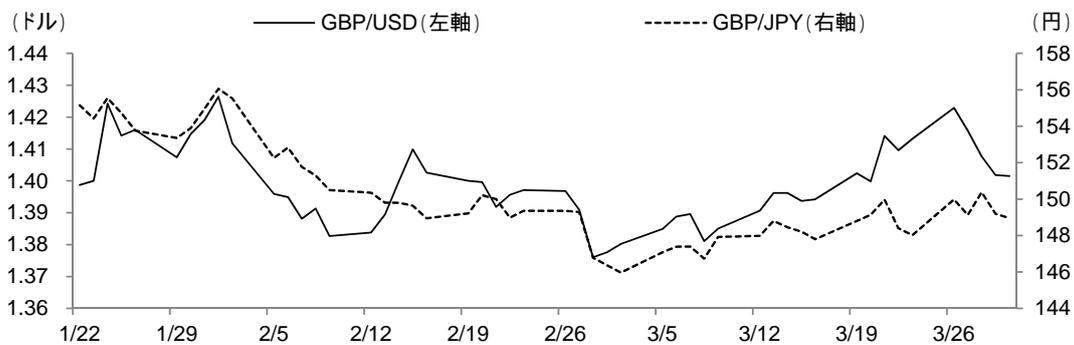
(2)ポイント[先週の回顧と今週の見通し]

先週の英ポンド相場は、一時的な乱高下を挟んで、比較的狭い値幅を小動き。英復活祭連休(30日~2日)を控え、週を通して、金融市場の動意は高くはなかった。週明け26日、特段の材料もない中、ポンドは堅調気味の滑り出し。欧州時間午前、独連銀バイトマン総裁の「2019年央の(欧州中銀)利上げを見込むのは非現実的ではない」との発言を「早期利上げに積極的」と読んで、ユーロが全面高に振れた。並行してポンドも対ドル、対円で統騰したが、対ユーロでは反落し、振り返って「ユーロに連れたポンド高」となった。27日、欧州勢の参入に前後して、ポンドは急落。この局面のポンド安要因については、英大手製薬会社によるスイス消費関連商品会社株買収(総額92億ポンド)の報や、英中銀金融安定委員会(FPC)から発表された「英のEU離脱は(在英金融機関に入手可能な)金融サービスに重大な危険性をもたらす」との報告などを材料視したものと考えられた。ただし、対ドルでポンドは週の高値となる1.4244から1.4066まで1.2%以上も急落したが、この局面のポンド安は一時的で、対円、対ユーロでの下落は相対的に小幅にとどまった。28日にもポンドは対ドルで下落したが、並行して対円、対ユーロではむしろ堅調気味に推移。この局面の値動きは、発表された米10~12月期GDP確報値の大幅上方修正(改定値の前期比年率+2.5%から同+2.9%へ)を受けたドル全面高と考えられた。その後もポンドは、動意の薄い中、軟調気味の推移を支配的とした。

今週の英ポンド相場は、引き続き動意を欠いた膠着を予想。今週、英国は連休明けで4営業日しかなく、英経済指標も各種3月購買部指数が予定される(3日(火)製造業、4日(水)建設業、5日(木)サービス業)程度で、ポンドが材料視する可能性は高くない。英中銀金融政策動向は気に掛かるものの、5月利上げの有無を材料視し始めた現状で、主要な英経済指標の発表もなく、些か迂遠な要因と位置付けられるのではないかと。他にも、ポンドの方向感に影響しかねない要因はいくつかあるものの、目先にポンドが材料視するほど、わかり易い結論が得られる可能性は低い。「貿易戦争」の行方は世界経済にとって大きな懸念には違いないが、更なる保護主義への傾倒にしても、自由貿易に向けた揺戻しにしても、近い将来、世界的な通商関係のあり方に関して明確な市場の合意が形成される可能性は低いだろう。英のEU離脱が、英経済とポンドの先行きにとって重要である点も変わらないが、好材料にせよ、悪材料にせよ、これまた近い将来に明確な合意に行き着く可能性は低い。先週29日は、リスボン条約50条発動後1年=英のEU離脱までちょうど1年ということで、英国ではさまざまな報道がされたが、離脱派が「独立(主権)を取り戻す」「EU以外の国々と自由に交易する」といった肯定的な面を強調するだけな一方、残留派は「EUとの貿易に関税が導入される可能性」や「金融サービス業が被る打撃」など否定的な面を強調するばかりで、相変わらず議論はかみ合わないままだった。英南部で起きた元ロシア二重スパイ毒殺未遂事件の顛末も、気にはなるものの、もはや、金融市場が材料視するには話が大きくなり過ぎてしまった感が強い。英とロシアの外交官追放合戦に続いて、27日までに、NATO加盟国を中心に20か国以上が、100人を超えるロシア外交官を国外退去に処している。事件の真相は引き続き気に掛かるものの、問題は英一国の手を離れて、NATO対ロシアの構図にまで発展してしまったと言えるだろう。

(3)先週までの相場の推移

先週(3/26~3/30)の値動き: (対ドル) 安値 1.4011 高値 1.4244 終値 1.4025
(対円) 安値 147.05 高値 150.31 終値 148.02



(資料)ブルームバーグ

4. 豪ドル

為替営業第二チーム 森谷 友一

(1)今週の予想レンジ: 0.7500 ~ 0.7800 80.00 ~ 83.00 円

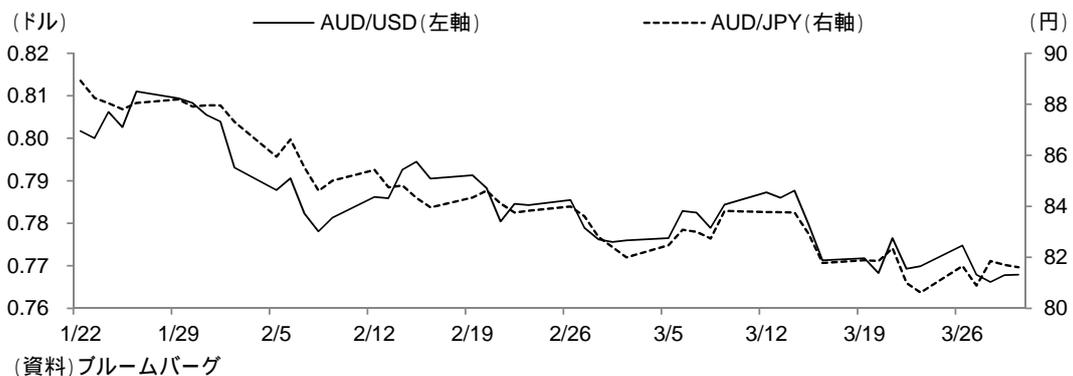
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は上昇する展開となった。週初26日に対ドルで0.77台前半、対円では80円台後半でオープン。週末のムニューシン米財務長官の「中国との貿易を巡る合意を期待する」との発言に加え、ナバロ国家通商会議委員長が「米国は既に中国との交渉のテーブルについている」と発言したことから米中貿易戦争に対する警戒感が後退すると、リスクオフの巻き戻しから対ドルで0.77台半ば、対円では81円台半ばまで上昇する展開となった。27日は前日海外時間の流れを引き継ぎ対ドル・対円でそれぞれ週高値となる0.7758・81.89円まで上昇する局面もあったが、米政府が中国の対米投資制限を発表するとの報道に再びリスクオフに転じ、対ドルで0.76台後半、対円では80円台後半まで水準を下げた。28日は北朝鮮の金正恩政権が日朝首脳会談の開催を模索しているとの報道を受けリスクオンムードが拡がり上昇する場面も見られたが、米10~12月期GDP(3次速報値)が前期比年率+2.9%と2次速報値(同+2.5%)から大幅に上方修正されたことや月末に伴うポジション調整フローからドル買い地合いとなる中、対ドルで0.76台半ば、対円では一時週安値となる80.77円まで下落する展開となった。29日は鉄鉱石価格の軟調推移に加えて、ポジション調整等によりドル買いが強まったことから対ドルで一時週安値となる0.7648まで下落。30日はイースター休暇のため、海外市場の多くが休場となる中、方向感、動意に乏しい推移に終始。対ドルでは0.76台後半、対円では81円台半ばで越週した。

今週の豪ドル相場は上値の重い推移を予想。今週は3日(火)の豪準備銀行(RBA)理事会に注目が集まる。今会合では政策金利の据え置きが予想されており、声明文において近い将来利上げに踏み切ることを示唆する文言変更があるかが焦点となりそうだが、足元ではマーケットにおけるRBAに対する年内利上げ期待は大きく低下している状況。米国の保護主義的な通商政策を受けて鉄鉱石価格が急落していることや、豪州経済と非常に関係性の強い中国経済に対する先行き不透明感が強まっていることが背景にある。かかる状況下、声明文の内容が年内利上げ期待の上昇につながるものとなる可能性は低いと考えられ、豪ドル買いを誘発するイベントとはなり難いと予想している。また、米国の通商政策についても引き続き注目が集まる。ムニューシン財務長官やナバロ国家通商会議委員長の発言を受けて貿易戦争に対する警戒感はやや和らいだ印象はあるものの、依然として同問題の終着点は見えていない状況に変わりはなく、リスクオンに転じるのはまだ先で豪ドルは買われにくい地合いが続くそう。以上より、2月以降続いている豪ドルの下落基調が反転するのは難しく、上値の重い推移となると予想する。

(3)先週末までの相場の推移

先週(3/26~3/30)の値動き: (対ドル) 安値 0.7643 高値 0.7758 終値 0.7686
(対円) 安値 80.50 高値 82.58 終値 80.62



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。